

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530138

研究課題名(和文) ヨーロッパ「極右」のイデオロギーと心理

研究課題名(英文) the ideology and the psychology of the european "extreme right"

研究代表者

村松 恵二 (Muramatsu, keiji)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：00113837

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず、いわゆる「極右」現象を、「極右」ではなく「右翼的ポピュリズム」概念によって把握することが適切であるという結論をえた。また、ポスト・マルクス主義者E・ラクラウの「空虚なシニフィアン」の理論が、政治行動全般において政治理念のはたす機能を適切に解明したこと、また、危機的状況の下では、そこに人間の持つ攻撃性が読み込まれ、正当化されることを明らかにした。さらに、動員に成功したポピュリズム・イデオロギーには、ユートピア的要素が含まれており、そこでは母子一体感の再現を求める欲望も刺激されていること、成功したリーダーたちの演説が、一種の成功物語になっていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：My study comes to the following conclusions:
It is appropriate to define so cold "extreme-right phenomenon" in Europe not as right-wing extremism, but as right-wing populism. The concept of "empty signifier", which E. Laclau, a post-marxist, has formed, can adequately explain the function of political ideas in politics. And when the situation is critical, it is in these political ideas(empty signifiers) that the human aggressiveness comes into action and is justified. Successful populist ideologies have necessarily utopian elements and give an impetus to the psychoanalytical desire of mother-infant bond too. And successful speeches of the populist leaders are constructed as a kind of success story.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：極右 右翼的ポピュリズム 新自由主義 敵対性 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

(1) ジャーナリズムにおいて一般に「極右」と呼ばれる「新しい右翼運動」は1980年代中葉から各国で話題にされ始めた。この運動について、これまで主として二つの視点から、すなわち、かつてのファシズム(ナチズム)との同質性を問題にする視点と、その政治手法としてのポピュリズムに着目する視点から、研究が進められてきた。研究開始当初は、たとえば、R. Thadden, u.a., *Populismus in Europa*, 2005 や F. Decker, Hrsg., *Populismus*, 2006 など、ポピュリズムという手法や外国人排除という側面に焦点を当てた研究が多くなっていたが、まだ、「新しい右翼運動」の性格規定が定まっているわけではなかった。この運動を、政治経済のグローバル化と福祉国家の危機のなかに位置づけて、正確に定義することが学術的に要請されていたのである。

(2) 「極右」研究は、とりわけ英語圏ドイツ語圏にはすでに数多く存在した。近年では、現象の説明のレベルを超え、多様な論点のもとに議論されるようになっていた。W. Gessenharter, H. Fröchling, Hg., *Rechtsextremismus und Neue Rechte in Deutschland*, 1998. のように、福祉国家からの離反と「極右」との関係を問う研究も出てきていた。オーストリア関連でも、H. Reinalter, u.a., Hg., *Das Weltbild des Rechtsextremismus*, 1998. が、多様な論点を提起していたが、「極右」の人種主義やナショナリズムを新自由主義(もっとも洗練されたものがリバタリアニズム)との関わりで考察しようとする研究は見あたらなかった。この学術的空白を埋める研究が要請されていたのである。

(3) ドイツ語圏では、社会ダーウィニズムは、優生学とナチズム支配下の安楽死政策に直結したために、まだ「客観的分析」の対象になりきっていなかった。また、英語圏では、たとえば、A. E. Ansell, *New Right, New Racism*, 1997. は、最近のアメリカとイギリスの人種主義を扱っているが、一部で、レーガン、サッチャー両政権の政治(新自由主義)との関わりを論じているにすぎず、理論的関連を問うものにはなっていなかった。さらに、わが国では、社会ダーウィニズムは、非難はされるがほとんど研究されていない領域であり、本格的な研究が待たれていたのである。

(4) 研究代表者は、これまで、オーストリア自由党について総括的に論点をまとめた研究を公表したことがある(山口・高橋編『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社、1998年)。その際に、「極右」がもつ新自由主義的要素に気づき、極右政治思想と新自由主義との関わりを究明すべきとの着想を得ていた。また、拙著『カトリック政治思想とファシズム』を

まとめる過程において、「極右」現象の中核的問題としてのナショナリズムについて、思想構造の分析が必要であることを痛感した。こうした経過の中で、社会ダーウィニズムを媒介として極右と新自由主義を結びつけるという着想を得たのである。本研究において、これまでの研究をさらに発展させて、現代政治思想としての「極右」政治思想の研究を飛躍的に発展させたいと考えていたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オーストリア自由党を中心的事例として、ヨーロッパにおけるいわゆる「極右」的政治現象を、1980年代以降急速に進行した政治経済のグローバル化と資本主義の原点回帰を歴史的背景として生じた、福祉国家の病理現象として考察し、「極右」イデオロギーの構造と運動発展の心理的メカニズムを明らかにすることにある。本研究は、1980年代以降、世界的規模で浸透してきた新自由主義と「極右」(右翼的ポピュリズム)とを相関関係のうちにとらえようとしている。両者に通底する思想要素として社会ダーウィニズムにおいて、それぞれの思想的要素の関係を明らかにし、病理現象を克服するための思想的糸口を見つけようとした。

3. 研究の方法

(1) まず、「極右」現象を理解するための理論的枠組み作りに集中した。「極右」概念については、すでに、U・バックスの研究(Uwe Backes, Hrsg., *Rechtsextreme Ideologien in Geschichte und Gegenwart*, 2003) や J・リュトグレンの研究(Jens Rydgren, ed., *Movements of Exclusion: Radical Right-Wing Populism in the Western World*, 2005)を中心に検討し、一定の知見を得ていた(村松「極右概念の再検討」、2010年)。これをさらに発展させ、極右と保守主義との異同、さらにはポピュリズム、ナショナリズム、右翼・左翼などの諸概念の関係を明らかにしようとした。

とりわけ、ポピュリズムについては、ポスト・マルクス主義者E・ラクラウが興味深い研究を蓄積しているので(Ernesto Laclau, *On populist reason*, 2005)、彼の議論を考察の俎上にあげながら、ポピュリズムを政治スタイルとして理解する従来のポピュリズム研究と比較しながら考察を進めた。ラクラウの議論を検討の中心にして、ポピュリズムの言説がもつ特徴を明らかにしようとした。

(2) 次に、いわゆる「極右」のイデオロギーが、新自由主義およびナショナリズムといかなる関係に立つのか、明らかにしようとした。ここでは、平成22年3月に公刊した『ナショナリズムとデモクラシー』(共著)における担当部分「ナショナルな価値と普遍

的価値」も議論の基礎にし、これをさらに発展させようとしたのである。イギリスのサッチャリズムについての分析を参照しながら、新自由主義的言説と「極右」のイデオロギーとの比較を行なった。

(3) さらに、社会ダーウィニズムの特徴を明らかにしつつ、新自由主義、ナショナリズムとの関わりを考察した。まず、代表的な社会ダーウィストであるH・スペンサーの思想について、楽観的な歴史観をベースにした社会ダーウィニズムとして、山下重一などの研究を基礎に簡潔に思想を確認した。それを踏まえて、むしろ悲観的なあるいは攻撃的な社会ダーウィニズムのあり方として、ピアソンなどの、世紀末の社会帝国主義の理論について検討し、その際、ホブソンなどの批判的な理論も参考にした。

また、アメリカの社会進化論についての研究も参考に、社会ダーウィニズムと新自由主義の関係を考察するための視点を獲得した。いわゆる「アメリカニズム」の基礎に、社会ダーウィニズムがあること、それが危機の時代には、排外主義を刺激するのではないかという仮説がその基礎になっていた。ベッカー(P. E. Becker, *Sozialdarwinismus, Rassismus, Antisemitismus und Voelkischer Gedanke. Wege ins Dritten Reich*, 1990)やH・W・コッホなど、ドイツ語圏の文献も検討しつつ、ドイツ語圏の社会ダーウィニズムとアメリカの社会ダーウィニズム(社会進化論)との論理構造の異同を意識しつつ考察をすすめた。

4. 研究成果

交付申請書に記載した本研究の目的は、オーストリア自由党を中心的事例として、ヨーロッパにおけるいわゆる「極右」的政治現象を、1980年代以降急速に進行してきた政治経済のグローバル化と資本主義の原点回帰を歴史的背景として生じた、福祉国家の病理現象として考察し、「極右」イデオロギーの構造と運動発展の心理的メカニズムを明らかにすることであった。

すでに平成23年度の研究において、「極右」と右翼的ポピュリズムとの関係を集中的に研究し、「極右」現象を理解するための理論的枠組みについて研究成果を上げることができた。いわゆる「極右」現象を、「極右」ではなく、「右翼的ポピュリズム」概念によって把握することが適切であるという、結論をえた。

平成24年度の研究では、右翼的ポピュリズムのイデオロギーの特徴について、集中的に研究した。すでに、いわゆる「言語論的転換」を経て、従来のイデオロギー論の不十分さは指摘されてきたが、右翼的ポピュリズムのイデオロギーの特徴を明らかにするために、ポスト・マルクス主義の理論を集中的に

研究した。検討の結果として、ラクハウの指摘する「空虚なシニフィアン」の概念を参照しつつ、「空虚」といえるほど高度に抽象的な政治理念によって、イデオロギー的統一が可能になることを明らかにした。のみならず、この「空虚さ」(抽象的理念)は、人々を政治的行動へと導く上で不可欠の心理的飛躍を可能にするものであり、そのメカニズムがあってはじめて、ポピュリズム運動の形成・発展も可能になることを解明することができた。

ポピュリズム運動は、政治経済の危機的状況の下で急速に発展するのであるが、そこでは、上述の「空虚さ」(理念)の中に人間の持つ攻撃性が読み込まれ、正当化されることを明らかにすることができた。これが、漠然としたナショナルな感情が攻撃的なナショナリズム(排外主義)に変化するメカニズムなのである。このメカニズムに注意することによって、穏健で、自然なナショナルな感情を排外主義へと昂進させないための努力が可能となるであろう。

最終年度には、右翼的ポピュリズムのイデオロギーが動員力を発揮するそのイデオロギー的、心理的メカニズムについて研究し、論文として公刊することができた。人間が政治行動へと移行するためには心理的飛躍が必要であるが、そのために、イデオロギーにはユートピア的要素が必要であること、また、母子一体感の再現を求める欲望も重要な役割を果たすこと、リーダーの重要性は言わずもがな、特に政治動員に成功したリーダーの演説には一定の型があり、一種の成功物語として構成されていることを明らかにすることができた。

本研究については、政治学会における学会員との懇談の際に、右翼的ポピュリズムについての研究が大変有益だったとの評価を受け、わが国におけるいわゆる「極右」研究に、またヨーロッパ政治史研究にそれなりのインパクトを与えることができた。今後さらに政治学界での発言の機会を逃さないようにしたい。

また、本研究の研究対象であるヨーロッパの右翼的現象については、日本のジャーナリズムにおいては、いまだに「極右」という呼び方が一般的であるが、本研究の成果を広く発信することによって、近い将来には、ジャーナリズムにおいても、正確に「極右」と「右翼的ポピュリズム」とを使い分けるようになることが期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

(1) 村松恵二、ポピュリズム・イデオロギーの動員力、人分社会論叢、第31号、2014年、1-18、査読無

(2)村松恵二、右翼的ポピュリズムのイデオロギー的特徴、人分社会論叢、第30号、2013年、1-19、査読無

(3)村松恵二、「右翼的ポピュリズム」概念をめぐって、人文社会論叢、第27号、2012年、1-21、査読無

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

村松 恵二(Muramatsu Keiji)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号： 00113837

(2)研究分担者

無

(3)連携研究者

無